書評

Bret W. Davis, Brian Schroeder, and Jason M. Wirth（eds.）
Japanese and Continental Philosophy: Conversations with the Kyoto School
Indiana University Press、2011 年、346 頁

中村佳史*

1. はじめに

本書『日本哲学と大陸哲学——京都学派との対話』は、ブレット・デービス、ブライアン・シュローダー、ジェイソン・ワースの三者によって編集された論文集である。デービスは、ロヨラ・メリーランド大学哲学科ヒギンズ寄附基金特別教授であり、ドイツ哲学、日本哲学、比較哲学を専門としている。日本哲学の研究に関して、近年、編者として大著 *The Oxford Handbook of Japanese Philosophy* (2019)を刊行した。シュローダーは、ロチェスター工科大学において哲学、宗教学の教授として、現代西洋哲学、日本哲学、宗教哲学、環境哲学などの幅広い分野で研究を行っている。そしてワースは、シアトル大学の哲学教授であり、大陸哲学、仏教哲学などを専門としている。

後ほど概括するが、本書は書名の通り、京都学派をはじめとする日本哲学と、フランス哲学やドイツ哲学などの大陸哲学との対話を試みる比較思想的な色彩の強い論文集であり、日本哲学と大陸哲学の双方に通じた上記三者によって編集されたものである。

2. 本書の概要

本書は 5 部構成で、17 本の論文が編まれている。各部の内容を紹介する前に、本書のテーマである「対話」について触れておく。本書は、「西洋哲学と日本哲学との対話、とりわけ大陸哲学と京都学派との対話を促すこと」（p. 1）を目的としており、両哲学の哲学的交流に焦点を当てている。ここで強調されているのは、京都学派には、東洋と西洋との間の哲学的対話を試

* 大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程；u773199b@ecs.osaka-u.ac.jp

みるという共通の姿勢があるということ、そして彼らは単なる自国の伝統に基づいた宗教理論家でも、戦争に加担した政治的イデオローグでもなく、何よりも第一に「哲学者」であり、ドイツ観念論、現象学、マルクス主義などの大陸哲学に精通し、これらと対決しようとしていた者たちであったということである。本書はそうした京都学派の試みを引き継ぎ、彼ら自身が対話したカント、ヘーゲル、ニーチェ、ハイデガーなどの西洋哲学者に限定せず、カール・レーヴィット、エマニュエル・レヴィナス、モーリス・メルロ＝ポンティ、ジャック・デリダ、リュス・イリガライ、マーク・テイラー、ジャン＝リュック・マリオンなど、対話相手の範囲が拡張される。対して、上記の西洋の哲学者との対話の場所に呼び込まれる京都学派の哲学者は、西田幾多郎、田辺元、和辻哲郎、西谷啓治、上田閑照などである。続いて、各部の内容を概観する。

第 1 部「京都学派と対話」では、本書のテーマである「対話」に関する論考が収められている。ここでは、グローバリズムによる全世界の単一化とそれに伴うニヒリズムに抗するために、「世界哲学」の原理を東西の哲学的対話において編み出す必要性があること（第 1 章）、京都学派は、レーヴィットが批判するように西洋文化を無批判に「盗用」したのではなく、異文化間の対話を試みたこと（第 2 章）が述べられる。また、京都学派内で行われた批判的対話である西田-田辺論争についても取り上げられる（第 3 章）[(1)]。

第 2 部「自己と世界」においては、まず京都学派の哲学が「自己の生命の記述（auto-bio-graphy）」、つまり自己を通して表現される生命を記述する営みとして捉え得ること（第 4 章）、西谷が、「意志の否定」の立場からニーチェの「力への意志」を批判することを通してニヒリズムの問題に取り組んでいること（第 5 章）[(2)]、また、西谷とニーチェが共に世界における様々な出来事を相互関連性の「流れ」に位置付けるエコロジカルな哲学を展開していること（第 6 章）、さらに、上田がメルロ＝ポンティとハイデガーとの対決を通して、いかに「二重世界内存在」などの概念を生み出したか（第 7 章）といったことが議論される。

第 3 部「神と無」では、宗教哲学について取り上げられる。まず、マリオンの「無条件の贈与」や神と人間の非対称性が西田の「逆対応」「絶対無」などの概念を用いて論じられる（第 8 章）。また、西田とテイラーの比較的読解を通し、二項対立の「相互包摂」という論理に基づいたポストモダン的

「非/神学」が提案され（第 9 章）、「絶対無」や「空」の概念に依拠して、後期近代における新たな黙示神学が探られる（第 10 章）。

第 4 部「倫理と政治」では、倫理および他者と政治、とりわけ、いわゆる京都学派の戦争協力について扱われる。「倫理」に関しては、まず田辺の『懺悔道としての哲学』（1946 年）とレヴィナスの他者論が比較され、両思想が共に、他者からもたらされる受動的な命令に応答することによって自己を変容させることの可能性を追究したことが明らかにされる（第 11 章）。そして、非二元論の観点から和辻とイリガライの思想を接近させ、両者が共に人間における身体性や関係性を強調した点で共通の倫理的基盤に立っていることが論じられる（第 12 章）。「政治」に関しては、座談会「近代の超克」の意義が、近代的な存在論を超克し、環境と自己の関係を再考する新たなパラダイムを構築することにあったと述べられる（第 13 章）。そして、京都学派がハイデガーとの関係において日本のファシズムを哲学的に形作ったという根拠のない糾弾が批判される（第 14 章）。

第 5 部「文法、芸術、構想力」では、まず「中動態」という文法形式をもとに西田と西谷の哲学を新たな視点で読解することの可能性が論じられる（第 15 章）。次に、京都学派にとって芸術や美学は彼らの哲学にとって本質的な哲学的問題であったことや（第 16 章）、三木が西田、カント、ビラン、リボー、ソレル、マリノフスキーなどとの対話によって、いかに「構想力の論理」を作り上げていったのか（第 17 章）ということが示される。

以上概観したように、本書にはあらゆるテーマに関する 17 本の論考が収められている。ここでは全ての論文を紹介し論評することはできないため、以下では、評者の関心と視点から部分的な評価を行うにとどまる。

3. 対話と論理

すでに述べたとおり、本書の軸となっている主題は「対話」、とりわけ東洋と西洋という異文化間の対話である。異文化間の対話といえば文化的、倫理的、政治的な問題であるが、dialogos という語が示すように、それは「論理」「言葉」の問題でもある。つまり対話とは、論理や言葉（logos）を通して（dia）行われる営みであり、ロゴスが対話の成立の重要な契機となる。本

書において、対話とロゴスの関係についてはそれほど表立って論じられてはいないが、ロゴスの側面に着目し、それに意義を見出している数本の論考がある。

まず、第 9 章「言語ゲーム・無私・神の死——現代の禅思想と脱構築における非/神学」において、コプフは西田の「場所的論理と宗教的世界観」（1945 年）とテイラーの『さまよう——ポストモダンの非/神学』（1984 年）を比較し、神と人間の非二元的な新たな関係を模索している。ここで鍵になるのが、二項対立の「相互包摂」「両義性」という論理であり、これと共にデリダの「脱構築」や西田がいう「肯定即否定」の論理、龍樹の『中論』が引き合いに出される。このような論理が用いられることによって、神と人間という二項の両極は、各々自己充足した実体ではなく、また各々断絶したものでなく、相互的な関係のうちに置かれることになる。

続いて、第 10 章「仏と神——新たな黙示神学への西田の寄与」において、アルタイザーは西田の「絶対無」や仏教の「空」といった概念を援用して、後期近代のキリスト教における新たな黙示神学を考察している。絶対的な否定かつ絶対的な肯定としての黙示は、神の磔刑でありまた神の復活でもあるとされる。つまり、神は自身の絶対的な否定を通して、自身を真に表現することができる。これがアルタイザーのいう新たな黙示神学である。ここで、アルタイザーは肯定かつ否定という相矛盾する事態を説明するために、大乗仏教中観派の「でありかつでない」という論理を重視している。

最後に、第 12 章「二項対立の超克——身体・自己・倫理をめぐる和辻哲郎とリュス・イリガライの思想」において、マッカーシーは、和辻とイリガライを、人間同士の関係性や相互依存性を強調した哲学者として強調し、両者の哲学を比較することを通して、自他の二元的な対立を超え、真に他者と出会うための倫理を追求する。和辻の「間柄」の概念と、イリガライの「関係的同一性」は、共に自己を個人的かつ関係的なものとして捉えるものであり、ここでは、「個性は維持されるが、他者によって影響され、相互に変化する。共同体に溶け込み、再び個として現れる」（p. 226）。このような関係性のあり方を説明するために、マッカーシーは「不一不二（異）」という論理を引いている。個と全体のどちらにも還元しない関係性において、自他関係の二元的対立は乗り越えられ、真に他者と出会うための倫理が可能になる。

以上、三つの論文において、日本哲学および東洋哲学と西洋哲学を比較し両者をつなぐ際に、論理の次元が重要な役割を演じていることが分かる。なぜ、上記の諸研究において、両哲学の対話、比較が成立しているのかということを問えば、それは両者が同じ論理を共有している、あるいは、し得るということが明らかにされるからだろう。神と人間との非二元的な関係性という主題で、西田とテイラーが結びつけられるとき、両者は二項対立の「相互包摂」「両義性」という論理の上に立っている。また、東洋的な「絶対無」や「空」といった概念を借りて、西洋において肯定かつ否定という新たな神の姿が語られるとき、「でありかつでない」という大乗仏教の論理が共有される。そして、和辻とイリガライが提起する自他関係の類似性を見出す際に、両者の間に「不一不二（異）」という論理が媒介される。このように、異文化間の哲学的対話の成立には、論理という媒体の共有が重要な条件となっていることが見て取れる。他に、ロゴスの問題、とりわけ「文法」に焦点を当てた研究に、第 15 章「空の中動態——西田と西谷」がある。章を改め、続いてこの論文について詳に見ておきたい。

4. 日本哲学と中動態

第 15 章「空の中動態——西田と西谷」において、エルバーフェルトは、「中動態」という文法形式の視点から、西田と西谷のテクストにアプローチしている。中動態は古典ギリシア語などに存在した動詞の態であるが、現代の日本語にも中動態が生き残っているとされる。その日本語の意味とは「自然発生性」「自発性」であり、何らかの動作が主体の意図なしに発生する出来事を示す。

そして、西田や西谷の思想はある点においては日本語の中動態の観点から読むことができると指摘される。まず西田に関しては、彼が多用する「考えられる」という表現と、西田の思考と執筆のプロセスが中動態の観点から問題にされる。エルバーフェルトによれば、「考えられる」という言葉の意味は、「可能」でも「受動」でもなく、第一義的には「中動」である。この言葉とともに記述される西田のテクストには、思考の絶え間ない生成と過程が直に表現されており、そのプロセスの中で新たな主題、概念、語彙が生

まれる。思考の行き先が予測できない西田の記述は、思考それ自体の「自発的」な展開であり、「考えられる」という形式は、自発的な思考のプロセスを表現したものである[3]。

次に、西谷の思想に関して、エルバーフェルトは西谷の「「覚」について」（1979）において記述されている「見える」「聞こえる」——誰かが「見る」「聞く」のでも、何かが「見られる」「聞かれる」のでもない——という言葉が、中動態を表現していると言う。古典ギリシア語では、「知覚する」は αἰσθάνομαι ともっぱら中動態で表されるが、この知覚という主客未分の原初的な場所、主体と客体の相互忘却の経験は、他の全ての経験を根拠づけるものであると説明される。

以上、西田、西谷の思想と中動態との関係を見たが、彼らの思想が「中動態的」と形容される所以は、何らかの経験において、主体＝主語が中心的な役割を果たしていないという位相にある。西田が「考えられる」と言いながら自身の思考を記述するとき、前景化しているのは「考える私」ではなく、思考の自発的生成それ自体である。また、西谷が「見える」「聞こえる」という経験を強調するとき、主語＝主体は経験の中に埋没しており、経験それ自体が自発的に生起している。この意味で、主語＝主体はまさに「空」であり、中動態は主語＝主体の「空性」を表現しているのである。

最後に、エルバーフェルトは現代西洋哲学における中動態に触れ、中動態を軸にした異文化間の哲学的対話の可能性を述べている。エルバーフェルトは、ジェイムズの「意識の流れ」、つまり非人称的な思考のプロセスを中動態の形式から解釈する。またハイデガーが「現象」という概念を古典ギリシャ語の φαίνεσθαι（おのれを示す）という中動態の動詞に遡って説明していることに着目し、さらに、デリダの「差延」と中動態との直接的な関係を明示している。エルバーフェルトは、日本哲学だけではなく、西洋哲学における中動態的な思考の存在に目を向けることによって、中動態という観点から両哲学に橋をかける可能性を示している。前章において見たように、ここでも間文化的対話の成立の鍵が中動態という言語に求められている。

さて、この論文の力点と独自性は、西田や西田の思想を中動態と結びつけることにあるが、日本哲学において中動態という主題は決して突飛なものではなく、むしろ木村敏や坂部恵はかねてから日本語における中動態に着目してきた。エルバーフェルトのこの論考は、日本哲学における中動態研究

の範囲をさらに深化、拡張させる役割を果たすことになるだろう。

5. おわりに

以上、本書のテーマである「対話」を、論理と言葉の観点から見てきた。そして、異文化間の哲学的対話の成立には、ロゴスの共有、伝達が重要な契機となることが示唆された。本書には登場しないが、まさに論理の観点から東洋と西洋の対話、交流の問題に取り組んだのが京都学派の山内得立である。第 9、10、12 章には中観派の祖である龍樹の名や「肯定かつ否定」「不一不二（異）」などの論理が散見されるが、これらこそ山内が『ロゴスとレンマ』（1974 年）において主に対象とした人物と論理であった。本書には、山内が取り組んだ問題系に呼応する部分があると思われる。

しかし、論理と言葉の問題に限らず、本書にはあらゆる主題を扱った論考があり、ここですべてを評することはできない。田辺とレヴィナス、和辻とイリガライを比較する独創的な研究もあるように、日本哲学と西洋哲学が相互に閉じることなく、常に新たな対話へと開き続けることを本書は我々に呼びかけている。

注

(1) 第 3 章の杉本耕一の論文には、邦語版の杉本（2002）がある。
(2) 第 5 章のブレット・デービスの論文は、邦語論文デービス（2005）の増補改訂版である。
(3) 西田の独特な文体と彼の思想との関係にまつわる研究には、森村（2020）などがある。森村は、西田の思想、とりわけ「場所の論理」は、日本語文法と密接な関係があり、前者は後者に制約されたものであるという。

参照文献

杉本 耕一 2002「田辺元の「種の論理」と西田哲学」日本哲学史フォーラム編『日本の哲学 第 3 号 特集 生命』pp. 110-126、昭和堂。
デービス、ブレット 2005「神の死から意志の大死へ——ポスト・ニーチェの哲学者としての西谷啓治」藤田 正勝・デービス、ブレット編『世界の中の日本の哲学』pp. 198-224、昭和堂。
森村 修 2020「西田幾多郎の「グラマトロジー」序説——〈日本語で哲学すること〉の〈意味〉について——」法政大学国際文化学部編『異文化. 論文編』(21): 89-132。
山内 得立 1974『ロゴスとレンマ』岩波書店。